

万葉の月

——「照る」「照らす」小考——

神野富一

一 「月が照る」

形式上自動詞・他動詞の対をなしていても、文義上も対応するとは限らないというタイプの動詞がある、と森田良行氏が指摘している。「月が照る」「月が庭を照らす」という場合がその一つで、両者は文意として連動せず、別箇の現象をいい、表現的意味が違ふ、という⁽¹⁾。たしかに現代語において、「月が照る」は月自体の状態をいい、「月が……を照らす」は月の他に對する作用をいって違いがある。この点、古代語においてはどうかだったか。

万葉集に「月」について「照る」という表現は計二六例ある。そのうち、「照る」が「月」の連体修飾格に立つ「照る月」というかたちの表現は、ほとんど、

照る月の雲隠ること（二〇七） 照るべき月を……雲か隠せる（一〇七九）

照る月を雲な隠しそ（一七一九） 照るべき月も雲隠り（二〇二五）

照る月の光も見えず（四九五） 天つみ空に照る月の失す（三〇〇四）

天照る月（一〇八〇・二四六三・三六五〇）

照る月は(の)満ち欠けす(四四二・一二七〇・四一六〇)

照り出づる月の影に見え来ね(二四六二)

(万葉歌の訓読は基本的には集成本による。以下同じ)

のようなものであり、前後の表現によって「照る月」は空に輝く(輝いている)月自体を意味することがわかる。すると「月が照る」という、「月」が「照る」の主格に立つかたちの、

出で来る月の遅く照るらむ(九八一) さやかに見よと月は照るらし(二二二五)

なども、月自体が輝く意味に解せられるし、

里には月は照らずともよし(一〇三九) 鄙にも月は照れれども(三六九八)

長浜の浦に月照りにけり(四〇二九)

など、「……に月が照る」と二格をとって照る場所がいわれた場合も、厳密には、その場所を月が照らす(照らしている)と解すべきではなく、その場所において月が輝く(輝いている)という意味である。

ところが、次の二例のみは、やや考慮を要する。

わがやどに月押照有ほととぎす心あれ今夜来鳴き響もせ(二四八〇)

窓越しに月臨照而あしひきのあらし吹く夜は君をしぞ思ふ(二六七九)

いずれも「月がおし照る」例である。やはり照る場所がいわれているが、その「わがやど」や「窓越し」は先の「里」「鄙」「浦」などと違って狭く身近である。そこに「月がおし照る」とはどのような事態なのだろうか。

「おし照る」は一般には、「照りわたる」。オシは接頭語。光が空一面に照るさまを強めていったもの(『時代別国語大辞典 上代編』のように解されている。しかし「わがやど(家の庭、の意)」や「窓越し」に「おし照る」というのを「照りわたる」「光が空一面に照る」と解するのはやや無理があろう。

集中、月の照る場所として「わがやど」や「窓越し」がいわれているのは特異である。これらは、漢詩における「月が……を照らす」という表現の影響を受けたものではないだろうか。二六七九につき、代匠記は、晋の陸機の「擬明月何皎皎」を出典として挙げる。

安寝^二北堂上^一 明月入^二我牖^一

照^レ之有^二余暉^一 攬^レ之不^レ盈^レ手

涼風繞^二曲房^一 寒蟬鳴^二高柳^一 (後略。文選卷三〇)

遠行の夫を偲ぶ妻の情を述べた詩で、芸文類聚の「月」の詩の項にも最初に挙げられている。窓からさし入ってくる月光、風、思婦の情が述べられ、たしかに二六七九は内容、表現ともこれに近いものがある。窓越しの月は、ほかにも、

皎皎窓中月 照^二我室南端^一 (文選卷三三・潘岳・悼亡詩)

落日隱^二欄楹^一 升月照^二房櫺^一 (玉台新詠卷三・謝惠連・七月七日夜詠牛女。「櫺」はれんじまど)

迴月臨^レ窓度 吟虫繞^レ砌鳴 (玉台新詠卷七・皇太子簡文・秋閨夜思)

無情明月、故々臨^レ窓。(遊仙窟)

などとみえる。また窓越しに限らず、六朝詩に多い妻が遠行の夫を偲ぶ詩に、部屋にさし入ってくる月光は好んで表現されたところであった。懷風藻の「玉燭調^二秋序^一、金風扇^二月幃^一」(刀利宣令・秋日長王宅宴^二新羅客^一)の「月幃」も、月光のさすところをいう。二六七九の「窓越しに月臨し照りて」は、「臨」の字義をも意識し、しかも和語の文法によって部屋にさし入ってくる月光を表現する工夫ではなかったか。先の「迴月臨^レ窓度」「無情明月、故々臨^レ窓」などがとくに参照される。これらの「臨」は、

于時、五色幡蓋、種々伎樂、照灼^二於空^一、臨垂^二於寺^一(時に、五色の幡蓋、種々の伎樂、空に照灼^{てりやう}りて、寺に臨み

垂れり) (皇極紀二年十一月。新編全集本による)

にもみえるごとく、来臨する意であろう。なお、二六七九の「臨照而」を旧訓にサシイリテとする。この訓自体は、代匠記初稿本に「此臨照而をさしいりてとよめるは、窓こしといふに心を得て、さしいりてとよめれと誤なり。おしてりてとよむへし」と一蹴されたのだが、その意味はかえって作意にかなっていたのではなからうか。

一四八〇についても同様なことが考えられる。いったい漢詩には月が地上の何かを照らすという表現が多い。万葉に多い「月が照る」という表現とは異なるのである。とくに、

望_二秋月_一 秋月光如_レ練

照_二耀三爵台_一 徘徊_二九華殿_一

と始まる沈約の「登_レ台望_二秋月_一」(玉台新詠卷九)は、秋月の光が移動しながら地上のさまざまな場所を照らし出すようすを華麗に描いて印象深い。また懷風藻にも、

菊風披_二夕霧_一 桂月照_二蘭洲_一 (吉智首・七夕)

琴樽猶未_レ極 明月照_二河浜_一 (藤原万里・遊_二吉野川_一)

と例がある。一四八〇の「屋前_{やと}」に近い表現を少し挙げれば、

月出照_二園中_一 珍木鬱蒼蒼 (文選卷二〇・劉楨・公謙詩)

月出照_二園中_一 冠珮相追隨 (同卷三一・江淹・雜體詩)

曉河没_二高棟_一 斜月半_二空庭_一 (玉台新詠卷五・何遜・閨怨)

庭中無限月 思婦夜鳴_レ砧 (玉台新詠卷一〇・江洪・詩七首)

葉緑園柳月 花紅山桜春 (懷風藻・采女比良夫・春日侍_レ宴)

最後の「葉は緑なり園柳の月」は、月光が御苑の柳を青々と照らし出しているさまをいう。このような漢詩の表現

に倣おうとし、しかも「月が照る」という和語の表現に拠るといふとき、「わがやどに月押し照れり」と工夫されたのではなかったか。

「おし照る難波」と、「難波」にかかる枕詞「おし照る」は、「おし照るや 難波の崎よ 出で立ちて わが国見れば」(記歌謡五三)、「おし照る 難波の崎の 並び浜」(紀歌謡四八)と記紀歌謡にもみえ、古い由来の言葉であつたと思われる。そして一説に、日の光が難波の海一面に照りわたる意味であるといわれる。その場合、接頭語「おし」は「一面に……する」という意味で下の語を強調すると解されるわけだが、先の万葉の二例の「月がおし照る」の「おし」も、分析的にはやはり「強く……する」意の強調表現とみるほかはないであろう。けれどもその「おし照る」は、必ずしも伝統の深みから選び取られた言葉ではなく、漢詩の月の表現との接触によって実質的にはいわば再生産された言葉であり、月光が特定の場所にさし入って照る、または押し入って照るといふ意味をになおうとしたのだと思われる。それはその場所を「照らす」というのに近い。

二 「月が照らす」

万葉歌中に「月」について「照る」といった例は多くあつたが、「照らす」といった確例はつぎのものにとどまろう。

天へ行かば 汝がまにまに 地ならば 大君います 許能提羅周 日月の下は……聞こし食す 国のまほらぞ

(八〇〇)

天地を^{てらす}良^す須^{ひつきの}日月乃極みなくあるべきものを何をか思はむ(四四八六)

山上憶良の作である前者の「この照らす日月の下は」といふ表現は、これも代匠記に指摘するように、詩経・邶

風の「日居月諸、照臨下土」(日と月と、下土を照臨す)を出典とする。同じく詩經・小雅・小明の「明明上天、照臨下土」や書經・泰誓下の「若日月之照臨光于四方顯于西土」も、作者には思い浮かべられていただろう。日月が地上世界を照らし臨む、またそのアナロジーとして天子が天下に照らし臨むという中国的表現・觀念を下敷きにしてこそ、その表現は成立している。神代紀の「即大日靈尊及月弓尊、並是質性明麗、故使照臨天地」や懷風藻の「皇明光日月、帝德載天地」(大友皇子・侍宴)なども含めて、日本古来の表現ではあるまい。四四八六の「天地を照らす日月」という表現は、直接的かどうかはともかく、憶良の模倣としてあろう。

その他、現行の注釈書類で、一般に月について「照」をテラスと他動詞で訓んでいるものは、

月読の光は清く雖照有感へる心思ひあへなく(六七二)

春日山押而照有おしててらせるこの月は妹が庭にもさやけかりけり(二〇七四)

の二例である。前者は主語が「月」ではなく「月読の光」であるが、仮に準じて扱う。また、「月」に類似の例として「月夜」がテラスとされるものに、

去年見てし秋の月夜は雖照相見くらひあひまし妹はいや年離る(二二二)

がある。いずれも仮名書きの例ではない。

六七一の第三句「雖照有」をテラセレドと訓む根拠は、注釈にもっとも詳しい。

桂、紀、西三本にはテラセレド、元類はテラセドモとある。「有」の文字があるから後者は当たらない。増訂本全註釈にテレレドモとあるは「比奈尔毛月波弓礼々杼母」(十五・三六九八)を例とされたのでそれも認められるが、テラスの仮名書例(五・八〇〇、廿・四四八六)もあり、「筑波嶺乎清照」(九・一七五三)の如きもテラシと訓むべき事が明らかであり、「日者雖照有」(二一・一六九)と共に今も古訓の方が穏かだと思ふ。

「照」を他動詞に訓む根拠として二点が挙げられている。一つは八〇〇・四四八六の「照らす日月」という仮名書き例であるが、これらが中国的な新しい表現とみられることはすでに述べた。二つ目の「筑波嶺乎 清照」(一七五三)はたしかに「照」をテラスと訓むべき例だが、主語は筑波山の「男神」と「女神」であり、月の例ではない。しかもこの場合には「筑波嶺を」と照らす対象が示されていることに留意する必要がある。

「照」をテラスと訓むべき例は、月について以外なら他にもあって、

大海の水底照之しづく玉(一三一九) 山照秋の黄葉の(一五一七)

あしひきの山間照桜花(一八六四)

針袋帯び続けながら里ごとに天良佐比安流氣騰(四一三〇)

と挙げられるが、最後の、見せびらかす意でやや特殊な「針袋」の例以外は、いずれも照らす主体と照らされる対象がはっきりしている。当然ながら、テラスは他動詞として目的語を求めるのである。さらに、その照らす主体と照らされる対象の関係にも留意される。たとえば「山照らす秋の黄葉」では、黄葉は山に属するので、つまり山を照り映えさせる黄葉、の意であり、黄葉が光源となって遠くの山を照らし出すといったものではない。他の例でもこの関係は変わらない。上代語テラスはするように自らが属する場所を照り映えさせる意味で用いられているので、そうであるとき、月が光源として他物を照らし出すという場合に自然にテラスという語を用いたかどうか。

テラスという場合は目的語を詠むのが自然であり、しかも自らが属する場所を照り映えさせる意味で用いられ、他方月がテルという表現は一般的であつたなら、「月読の光は清く雖照有」の「照」をあえてテラスと他動詞に訓む必要はないと考えられる。全註釈のいうように、月については、

天さがる鄙にも月は弓礼々杼母妹ぞ遠くは別れ来にける(三六九八)

という例があり、他にも、

ひさかたの安麻弓流月波 (三六五〇)

ひさかたの月者弓利多里 (三六七二)

長浜の浦に都奇氏理尔家里 (四〇二九)

と仮名書き例をみる。「月読の光は清くテレレドモ」と訓むか、あるいは「おほのびにかも月之照有」(九八六)の例もあるので「月読の光は清くテリタレド」と訓むべきであろう。

他の二例(一〇七四・二二一)についても同様なことがいえるのだが、少し補う。一〇七四は前節で挙げた「……に月がオシテル」という例からも、「春日山押而照有この月は」と訓み、「春日山に照りつけているこの月」と解すべきである。代匠記精撰本に、「押而ハオシテト読ヘシ。照有ヲモ、テリタルトモヨムヘシ」という。ただし、訓みはそうでありつつ、意味は「春日山を照らすこの月」というに近い。二二一は三六九八の存在が傍証となろう。三六九八(遣新羅使人作)はその表現から、月の不変に人の命の無常を対比して嘆く人麻呂の挽歌、二二一をふまえ、死別の場合を生別の場合に転用した作だとみられる。だとすれば、人麻呂作も第三句はテレレドモであった可能性が強い。ただし、後にもふれるが、人麻呂歌の「月夜が照る」は月自体が輝くのではなく、月が空にあり、その照らす夜の空間が発光するように明るんでいる状態をいう。

さて以上の訓義の考証が正しいとすれば、少なくとも万葉集には、月について「照らす」という表現は、中国的な新しい表現とみられる「照らす日月」の例を除けば、なかったことになる。⁽³⁾万葉の人々の伝統では、月は「照らす」ものではなく「照る」ものであったのだ。それはいったい、どういうことか。

三 「月が照る」と「月が照らす」

「月が照る」と「月が照らす」。われわれはあまり違和感もなくどちらの表現にもなじんでいるが、しかしもとは、二つは月の現象についての別種の認識であったといえる。「月が照る」は月の状态的な把握である。むしろ上代においてのそれは、われわれの物理的・客観的なそれとは異なり、神話的観念を通してその本質に至るという仕方が根底にもたれていたはずだが、その月が照り輝く事態そのものは「月が照る」と状态的に把握されたのだった。対して「月が照らす」は、事態を月という主体の他に対する作用として把握する仕方である。中国的なそれは、「日と月と、下土を照臨す」「日月の照臨する若く、(四方を光らし、西土を顕はせ)」といった宇宙の秩序の認識が前提されている。そこでは月はなにげなく空に照り輝いているのではなく、天の秩序を構成し、その秩序によって運行し、高みから下界のくまぐまを照らしたすものとされたのである。

さて、「月が照る」は月自体が照り輝く事態を表すので、月光で下界が明るんでいる状態を直接に表すのではない。では「月が……を照らす」という表現がまだ確立していないとき、下界が明るんでいる状態をどのように表したか。

み空行く月の光にただ一目相見し人の夢にし見ゆる(七一〇)

我妹子しわれを思はばまそ鏡照り出づる月の影に見え来ね(二四六二)

などのように、月光を詠むことがその一つの表現法であっただろう。ただそれは万葉歌には例が少ない。一般には、「月夜」という言葉がそれになったのだと推察される。

万葉歌には「月夜」という言葉が五五例(うち単独に「月夜」というもの四二例、「夕月夜」などの複合語二三

例)も使われている。この「月夜」は、通説では月・月光という意味、または月のある夜という意味とされているが、そうではなく、月明かりの夜の空間、ないしはその状態、さらにそれが継続する時の意味で用いられているということを前稿で考察した³⁾。古事記に月読命が「夜の食す国」を支配するとされているが、「月夜」はそうした月神の支配する夜の世界という神話的な観念を根拠としてもつ言葉なのである。それは昼間の世界とは違い、また闇夜とも対立・交替する独特な夜の空間世界を原義とした。

その「月夜」について、「照る」というものが一四例ある。一部を挙げると、

ぬばたまの夜霧の立ちておほはしく照れる月夜の見れば悲しさ(九八二)

妹が家の門田を見むとうち出来し心もしるく照る月夜かも(一五九六)

心なき秋の月夜のもの思ふと寐の寝らえぬに照りつともとな(二二二六)

長谷の斎機が下にわが隠せる妻あかねさし照れる月夜に人見てむかも(二三五三)

「月夜」が「照る」とは、月が空にあり、その光で夜の空間が照り輝いていることを意味した。月が下界を照らしている事態を、状态的に把握したのである。

すると、万葉歌では、主には先の「月が照る」とこの「月夜が照る」で月の輝き照らす現象を表現していたのだ。月や月夜のそうした状态的な把握が、一つの古代的、伝統的な空間認識であったのだといえる。そこへ漢詩の「月が照らす」という、異質な世界観を背景にもつ表現が新しく獲得され、やがてそれも歌における月の表現に組み入れられることになっていった。「月が照る」「月夜が照る」文化に、「月が照らす」文化が重層していったといってもよい。

平安朝以降、「月夜」という言葉は空間的概念をほぼ失い、そのため月の雅語に特殊化していったらしいことなども前稿に述べた。その時代にこそ、

佐保山のははそのもみぢ散りぬべみ夜さへ見よと照らす月かけ（古今和歌集・二八二）

秋の月山辺さやかに照らせるは落つるもみぢの数を見よとか（同・二八九）

暗きより暗き道にぞ入りぬべき遙かに照らせ山の端の月（拾遺和歌集・一三四二）

世を照らす月隠れにしさ夜中はあはれ闇にや皆まどひけん（後拾遺和歌集・一一八二）

（新編国歌大観による。ただし、一部表記を改めた）

など、「月が照らす」という表現が確立していったであろう。そこにはまた、漢詩文における月の表現や月についての観念の、一般的なレベルでの受容と内化ということもあったはずである。そしてそのような後世の和歌世界における「月が照らす」という表現の蓄積が、ふり返って万葉集を訓読する際、先に挙げたいくつかの万葉歌に「月がテラス」という訓を、その時代の人々の主観においてはあまり不自然さを感じることなく、与えることになったのだと考えられる。

初めに述べた、「月が照る」「月が庭を照らす」という場合、「照る」と「照らす」は形式上は自動詞・他動詞の対をなしていても文義上は対応していない、二つの文は文意として連動せず、別箇の現象をいい、表現的意味が違ふ、といった現代語における一つの事象も、以上のような二つの言葉の歴史にその理由がひそんではいないだろうか。

注 記

（一）森田良行『動詞の意味論的文法研究』一六〇・二四九頁（一九九四年）

（二）二六七九の「臨」については、小島憲之『上代日本文学与中国文学』（一九六四年）にも「漢籍の例を万葉集の文字へと移し、視覚の面にも意を払ったもの」と指摘する（八〇六頁）。

- (3) 「日」がテラスとされるものに、「あかねさす日者ひはてらせれど雖照有ぬばたまの夜渡る月の隠らく惜しも」(二六九)があるが、「照らせれど」の「す」は尊敬の助動詞であるという通説に従う。テラスが他動詞である「日がテラス」という表現も、本文中に挙げた「照らす日月」の二例以外には万葉集にみえない。
- (4) 拙稿『『月夜』考』(『上代文学』八三号、一九九九年一月)